様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ４ 月 ２５ 日現在

機関番号：１６２０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2013
課題番号：２４７３０５３８

研究課題名（和文）動機づけの安定性に関する研究―概念の確立と測定方法の開発―

研究課題名（英文）A suty on stability of motivation: conceptualization and development of a scale

研究代表者
岡田　涼（OKADA, RYO）

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：７０５８１８１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,300,000円、（間接経費）　390,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、動機づけの安定性を測定する方法を開発し、その特徴を明らかにすることを目的としていた。研究成果は、次の4点であった。1つ目に、状態的動機づけの複数回測定によって動機づけの安定性を捉えることができた。2つ目に、動機づけの安定性の様相にはいくつかのパターンがあることが示された。3つ目に、動機づけの安定性の程度は、自律的な動機づけと関連する部分があった。4つ目に、主観的評価によって動機づけの安定性を測定する尺度が作成された。これらの研究成果は、大学教育をはじめとする高等教育場面における学習意欲の問題に対して新たな示唆を与えるものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop the measures of stability of motivation and to examine the characteristics of stability of motivation. The findings were as follows. First, the repeatedly measuring situational motivation enabled to capture the stability of motivation. Second, different pattern of instability of motivation were found. Third, stability of motivation was related to autonomous motivation. Fourth, a self-reported measure of stability of motivation was developed. Some suggestions were provided to academic motivation in higher education.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育心理学

キーワード：動機づけ　動機づけの不安定性　大学生　自律的動機づけ

１．研究開始当初の背景

教育場面における生徒や学生の学習意欲の問題が指摘されて久しい。大学や専門学校等の高等教育場面では，学習意欲の継時的な低下が問題視されている。入学直後あるいは学期初めには高かった学習意欲が授業の進行とともに次第に低下していき，授業欠席の増加や授業放棄というかたちで顕現化する。また，中学生や高校生においても，学習内容の目新しさが薄れ難易度が上がるにつれて学習意欲が低下していくことが報告されている（山森，2004）。

学習意欲低下の問題に対して，動機づけ研究では様々な理論的観点からアプローチを試みてきた。しかし，学習意欲の低下に対する有効な支援方策は十分に確立されておらず，動機づけ研究の知見が教育実践に対して必ずしも貢献できていないのが現状である。その原因の１つは，動機づけ研究において検討されてきた概念が，学習意欲の実態を十分に捉えていないことにある。これまでの動機づけ研究では，学習者の特性的な動機づけに焦点をあて，パフォーマンスや学校適応などの学習成果を予測しようとしてきた（Elliot, 2005; Ryan & Deci, 2009）。たとえば，代表的な動機づけ理論の１つである自己決定理論の枠組みに基づく研究では，学習に対する動機づけを測定する尺度を作成し，自律的動機づけが学習課題に対する興味や友人との学習活動，学校適応などを予測することが明らかにされている（岡田，2006，2008；岡田・中谷，2006）。これらの知見は，特性的な動機づけが学習成果に対して一定の説明力をもつことを示した点で意義がある。

その一方で，特性的な側面とは別に，動機づけには様々な出来事の影響を受けながら日々変動する側面がある。上述の学習意欲の継時的な低下の問題を解決するためには，状態的動機づけの変動（動機づけの安定性／不安定性）に注目することが不可欠である。自尊感情に関する研究では，近年その安定性に関する研究が行われている（Kernis et al., 2008）。自尊感情に関する研究知見のメタ分析では，自尊感情の高さと自尊感情の安定性の間に関連があることが明らかにされている（Okada, 2010）。

自尊感情と同様に，動機づけにも日々変動する側面があり，動機づけの安定性には大きな個人差があると考えられる。動機づけに対する教育的介入を考える場合，学習者の動機づけを適切にアセスメントする必要があり，安定性の面からのアセスメントは有用な情報をもたらす。しかし，これまで動機づけの安定性に関する実証的研究は行われておらず，その概念化と測定方法は十分に確立されていない。動機づけ研究を高等教育をはじめとする実際の教育場面に役立て実践的示唆を提供するためには，日々変動する動機づけの安定性を概念化し，その測定方法を開発することが不可欠である。

２．研究の目的

本研究の目的は，大学生をはじめとする高等教育場面での学習者を対象に，動機づけの安定性／不安定性を測定する方法を確立し，その個人差を明らかにすることであった。また，動機づけの特性的な側面である自律的動機づけおよび動機づけ方略との関連から動機づけの安定性がもつ概念的特徴を明らかにすることを目的とした。

まず，動機づけの安定性について，状態的動機づけの複数回評定による方法を開発することを目的とした。この方法によって測定された動機づけの安定性について，自律的動機づけおよび動機づけ方略との関連からその特徴を明らかにする（研究 1）。

次に，動機づけの不安定性のパターンを明らかにすることを目的とした。状態的動機づけの複数回測定から，個人ごとの動機づけの変化のパターンを特定し，大学生における動機づけの安定性／不安定性の様相を明らかにする（研究 2）。

さらに，動機づけの安定性に対する主観的評価による測定方法を開発することを目的とした。一時点での測定によって，学習者本人の主観的な評価から動機づけの安定性を測定し得る尺度を作成する（研究 3）。

３．研究の方法

(1) 研究 1-1　週ごとの複数回評定による動機づけの安定性の測定

大学生，短期大学生，専門学校生合計 291 名を対象に，状態的動機づけの複数回評定の調査を実施した。調査協力者は，週１回のペースで，学習に対する状態的動機づけについて 12～13 回の評定（1 項目，7 件法）を行った。その評定値の個人内平均を「動機づけの全般的レベル」，個人内標準偏差を「動機づけの不安定性」とした。さらに，自律的動機づけを尋ねる尺度（岡田，2006）と動機づけ方略を尋ねる尺度（伊藤・神藤，2003）を併せて実施し，それらの尺度得点との関連を検討した。

(2) 研究 1-2　１日ごとの複数回評定による動機づけの安定性の測定

大学生 22 名を対象に，1 日ごとに状態的動機づけの複数回評定の調査を実施した。調査協力者に冊子体のかたちで質問紙を配布し，1 日 1 回のペースで，学習に対する状態的動機づけを１週間にわたって評定してもらった（4 項目，7 件法）。同時に，1 日のなかで印象的であった学習に関する出来事の記述を求めた。研究 1-1 と同様に，評定値の個人内平均を「動機づけの全般的レベル」，個人内標準偏差を「動機づけの不安定性」とした。さらに，自律的動機づけを尋ねる尺度（岡田，2006）を併せて実施し，それらの尺度得点との関連を検討した。

(3) 研究 2　動機づけの安定性のパターンの検討

大学 1 年生 187 名を対象に，状態的動機づけの複数回評定の調査を実施した。調査協力者は，週 1 回のペースで，学習に対する状態的動機づけについて 11 回の評定を行った（1 項目，7 件法）。その評定値をもとに，研究 1-1 と同様の方法によって動機づけの不安定性を算出したうえで，動機づけの不安定性が高いものを抽出した。抽出された調査協力者について，11 回の状態的動機づけの変化のパターンをクラスタ分析によって明らかにした。

(4) 研究 3　主観的評定によって動機づけの安定性を測定する尺度の作成

小塩（2001）の尺度をもとに，動機づけの不安性の知覚尺度を作成し，大学生に実施した。動機づけの不安定性の知覚尺度（5 項目，5 件法）の特徴を明らかにするために，複数の尺度との関連を検討した。まず，動機づけの不安定性の知覚尺度と自律的動機づけ（岡田，2006）との関連を検討した。次に，動機づけの不安定性尺度と課題の先延ばし尺度（藤田，2005）との関連を検討した。また，週ごとの状態的動機づけの評定および 1 日ごとの状態的動機づけの評定と同時に動機づけの不安定性の知覚尺度を実施することで，複数回評定による動機づけの不安定性との関連を検討した。

４．研究成果

(1) 研究 1-1　週ごとの複数回評定による動機づけの安定性の測定

状態的動機づけの複数回評定によって，動機づけの不安定性を算出した。動機づけの不安定性の平均値は，大学生で 0.64（SD=0.39），短期大学生で 0.80（SD=0.55），専門学校生で 0.46（SD=0.40）であり，いずれの学校種においても動機づけの安定性の個人差があることが示唆された。

動機づけの不安定性と自律的動機づけおよび動機づけ方略との関連を検討したところ，短期大学生と専門学校生においては，自律的な動機づけである同一化的調整が高いほど動機づけの不安定性が低いことが明らかになった（表 1）。また，短期大学生においては，取り入れ的調整が負の関連を示し，専門学校生においても内発的動機づけが負の関連を示した。動機づけ方略については，どの学校種でも関連がみられなかった。

以上の結果から，動機づけの安定性には個人差が存在すること，自律的な動機づけをもつ学習者ほど動機づけの安定している可能性があることが示された。一方で，学校種別による違いもみられ，短期大学生においては，不安などによる動機づけ（取り入れ的調整）が状態的動機づけを安定したものにしている側面がある可能性も示唆された。

表1 動機づけの不安定性と自律的動機づけ，動機づけ方略との関連

	大学生	短期大学生	専門学校生
自律的動機づけ			
外的調整	-.07	-.15	.17
取り入れ的調整	-.01	-.38**	-.16
同一化的調整	.08	-.30*	-.21+
内発的動機づけ	.02	-.08	-.43**
動機づけ方略			
整理方略	-.08	—	—
想像方略	.01	-.18	.04
ながら方略	—	-.01	-.15
負担軽減方略	.02	-.03	.18
めりはり方略	—	-.13	.15
内容方略	-.03	-.06	-.03
社会的方略	.03	-.10	-.02
報酬方略	—	-.22	.12

+p<.10，*p<.05，***p<.01

(2) 研究 1-2　1 日ごとの複数回評定による動機づけの安定性の測定

状態的動機づけの複数回評定によって，動機づけの不安定性を算出した。動機づけの不安定性の平均値は 4.33（*SD*=1.51）であり，動機づけの安定性の個人差があることが示唆された。

まず，動機づけの不安定性と自律的動機づけとの関連を調べたところ，有意な関連はみられなかった。以上の結果から，1 日ごとの評定によっても動機づけの不安定性には個人差がみられること，1 日ごとの評定による動機づけの不安定性は，1 週間ごとの評定とは異なり，自律的動機づけと関連しないことが示された。

また，状態的動機づけの評定とともに記入された日常の出来事の記述について，状態的動機づけが変化した日には，協同の経験や困難の達成などが報告された。このことから，状態的動機づけの変化は学習に関する出来事や環境的要因に左右されている可能性が示唆された。

(3) 研究 2　動機づけの安定性のパターンの検討

状態的動機づけの複数回評定によって，動機づけの不安定性を算出し，その平均値以上のもの 46 名を動機づけが不安定な群として抽出した。抽出した対象者について，11 回の状態的動機づけの評定を用いて，クラスタ分析を行ったところ，4 つのクラスタが見出された（図 1）。4 つのクラスタの特徴は，入学時から高いレベルで比較的小さい変動を示す群（クラスタ 1），入学時は動機づけが高いものの，学期が進むとともに低下していく群（クラスタ 2），入学時から動機づけが低く，学期が進むとともにさらに低下していく群（クラスタ 3），入学当初は動機づけが低く，学期が進むにつれて次第に高まっていく群（クラスタ 4）であった。この結果は，動機づけの不安定性にいくつかのパターンが存在することを示唆するものである。

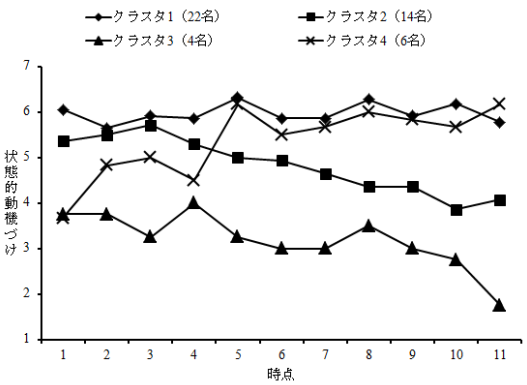

図 1　状態的動機づけの変化のパターン

（4）研究 3　主観的評定によって動機づけの安定性を測定する尺度の作成

動機づけの不安定性の知覚尺度と自律的動機づけ尺度との関連との関連を検討したところ，動機づけの不安定性の知覚は，自律的動機づけの下位側面である同一化的調整と弱い正の相関を示した（r=.18，p<.05）。また，学習量志向を加えたパスモデルにおいて，課題の先延ばしとの関連を調べたところ，動機づけの不安定性の知覚から先延ばしに対して，有意な正のパスがみられた（β=.35，p<.001）。以上の結果から，動機づけの不安定性の知覚尺度によって測定される不安定性は，自律的な動機づけの側面を反映する部分をもちつつも，課題の先延ばしにつながる側面を有していることが示唆された。

動機づけの不安定性尺度と週ごとの複数回評定による動機づけの不安定性との関連を検討したところ，動機づけの不安定性尺度の得点は，複数回の評定値の個人内標準偏差によって定義される不安定性（研究 1-1 の方法）と有意な関連を示さなかった（r=.05，n.s.）。次に，1 日ごとの複数回評定による動機づけの安定性との関連を検討したところ，動機づけの不安定性尺度の得点は，複数回の評定値の個人内標準偏差によって定義される不安定性（研究 1-2 の方法）と正の関連を示した（r=.54，p<.10）。このことから，動機づけの不安定性の知覚尺度の妥当性の一端が支持されるとともに，この尺度によって測定される不安定性は，週単位での変化ではなく，日によって変動する短期的な動機づけの不安定性を測定するものであることが示された。

（5）研究成果のまとめ

以上の研究成果は，以下の 4 点にまとめることができる。①状態的動機づけの複数回測定によって，動機づけの不安定性を捉えることができた。これまでは安定した特性的な動機づけに焦点があてられてきたが，短期間に変動する動機づけの側面についても焦点をあて，測定する方法を開発することができた。②動機づけの不安定性の様相にはいくつかのパターンがあることが示された。③動機づけの不安定性の程度は，自律的な動機づけと関連する部分があった。一方で，動機づけの不安定性は，特性的な動機づけだけでなく，環境的な要因によっても影響を受ける可能性が示唆された。④主観的評価によって動機づけの不安定性を測定する尺度を作成した。

以上の研究成果は，大学教育をはじめとする高等教育場面における学習意欲を捉え，その変化や関連要因を実証的に検討するための基礎を提供するものであるといえる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①岡田　涼・伊藤崇達・梅本貴豊，動機づけの全般的レベルおよび不安定性を捉える試み―動機づけ特性，自己動機づけ方略との関連から―，教育心理学フォーラム・レポート FR-2013-01，査読有，2013 年，1-11 頁

②岡田　涼・伊藤崇達・梅本貴豊，大学生における状態的動機づけの変化のパターン香川大学教育学部研究報告第 I 部第，査読無，139 号，2013 年，139-144 頁

〔学会発表〕（計 5 件）

①岡田　涼・伊藤崇達，大学生における短期的な動機づけの不安定性―1 日ごとの変化の測定―，日本発達心理学会第 24 回大会，査読無，2014 年 3 月 22 日，京都大学

②岡田　涼・伊藤崇達・梅本貴豊・大谷和大，動機づけを重視することが課題の先延ばしに及ぼす影響―動機づけの不安定性を介するプロセス―，日本パーソナリティ心理学会第 22 回大会，査読無，2013 年 10 月 12 日，江戸川大学

③岡田　涼・伊藤崇達・梅本貴豊，自律的動機づけと状態的動機づけの不安定性との関連―2 つの測定方法による検討―，日本教育心理学会第 55 回総会，査読無，2013 年 8 月 19 日，法政大学

④岡田　涼・伊藤崇達，動機づけの不安定性を測定する尺度の作成，日本発達心理学会第 23 回大会，査読無，2013 年 3 月 16 日，明治大学

⑤岡田　涼・伊藤崇達・梅本貴豊，大学生における動機づけの不安定性の関連要因―自律的動機づけと動機づけ調整方略―，日本教育心理学会第 54 回総会，査読無，2013 年 11 月 25 日，琉球大学

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
岡田　涼（OKADA, Ryo）
香川大学・教育学部・准教授
研究者番号：70581817

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：